

Title	明治ナショナリズムと「人種主義」：1880年代後半～90年代における政教社の思想をてがかりに
Author(s)	水野, 守
Citation	大阪大学, 2010, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/58529
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について 〈/a〉 をご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

氏名	みずの 野 守
博士の専攻分野の名称	博士(文学)
学位記番号	第 24152 号
学位授与年月日	平成22年9月22日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 文学研究科文化形態論専攻
学位論文名	明治ナショナリズムと「人種主義」—1880年代後半～90年代における政教社の思想をてがかりに—
論文審査委員	(主査) 教授 杉原 達 (副査) 教授 富山 一郎 教授 川村 邦光

論文内容の要旨

本論文は、明治中期の思想集団である政教社の掲げた「国粋主義」を、当時の時代状況の中で検討した思想史研究であり、400字詰め換算で500枚を越す大部の論文である。構成は、序論に続いて本論全7章が展開され、最後に結論が記されている。序論では、政教社や明治ナショナリズムをめぐる研究史の整理を通じて、自らの方法的立場が示される。とくに「世界の一体化」の時代におけるナショナリズムと「人種主義」の連関に注目し、本論の分析の軸として設定する。当該期日本は、近代国家としての体制が成立する時代であったとともに、日本・日本人と外国・外国人との対面関係が広がりを見せる時代でもあった。従来、内発的ナショナリズムの文脈において位置づけられてきた「国粋主義」イメージを脱構築し、内地雑居や移民をめぐって複雑に関連付けられていく自他認識の錯綜について考察することの意義が示される。第一章は、政教社の中心的存在の一人である志賀重昂の南洋巡航を論じる。志賀がマオリ人にまなざされ、あるいはオーストラリアで中国人と誤認される経験から生じた志賀の不安が析出され、それが帰国後に刊行した『南洋時事』では屈折したナショナル・アイデンティティとして記述されていることを示す。第二章は、政教社結成から1889年の条約改正反対運動における「国粋主義」の展開を追い、この概念が流動的なものであったことを論じる。とくに『日本人』は、いわゆる「支那人」を強く意識し、また中国人移民と海外の排斥運動との衝突に反応していたことを実証する。従来のナショナリズム研究は「国民」の創出に注目してきたが、ナショナリズムと「人種主義」の観点からみれば、中国・中国人イメージの慎重な分析が重要であり、同時に日本人移民がどうとらえられていたのかという問題を提起して、次章以下に繋げる。第三章では、『日本人』の後継誌『亜細亜』の諸論説や三宅雪嶺の『真善美日本人』を

取り上げ、政教社のアジアに対する「講究」という姿勢が「国粋主義」の実践であるとともに、列強の進出や清国の強国化の前に、日本の文明性の顕示が黄色人種排斥と反応しており、アジア情勢の予測不可能性に揺れていたことを示す。第四章は、政教社の一人・鈴木券太郎の人類学的知見と思考を丁寧に追及し「国粋主義」との関連を論じる。第五章では、やはり政教社の同人・長沢別天の1891～1893年の渡米経験を問題とする。中国人排斥が渦巻くアメリカにおいて、日本人移民ないし日本を論じる際に、実は日本の文明性の顕示と裏腹に黄色人種内での優位性についても不安と脅威が意識されており、その内実の複雑さこそが「人種主義」を考える手がかりになるとみる。第六章では、日清戦争期の政教社の中国・アジア認識が取り上げられる。戦争肯定論の中に、戦前からのアジアを「講究」する姿勢が流れていること、また『東亜説林』の若手論者にも引き継がれていることが示される。第七章では、戦後とくに1897年以降の中国分割論をめぐる政教社の態度が分析される。1898年には東亜会が結成され、戦前の学問的「講究」の反復が、清国改革派との連携とその変容を通じて、清国への政治的介入として主張されるに至ったことが示される。「支那保全」論とは、そのような過程の中での物言いであったのである。結論では、本論の到達した地平を確認し、残された課題を整理する。

論文審査の結果の要旨

本論文は、国民的アイデンティティが、異なる存在との関係性において構成されていくプロセスを、欧化の対抗言説の形成、とりわけそのナショナリズムの健全さの有無を問う方法をもって分析するのではなく、われわれの、そして他者の揺らぎの言説の構成としてとらえようとした。世界の一体化の中で作動する「人種主義」が、政教社の「国粋主義」の性格を複雑に規定していったことを、文献の徹底的な渉猟を通じて詳細に示した点は高く評価できる。また従来、政治史や政治思想史の枠内で議論されがちであった「国粋主義」を、旅行記、人類学、民俗学、移民論、戦争論など人文学のさまざまな分野にわたる結節点として捉え直した点、そして「人種主義」をめぐる同時代的な歴史とその後の理論的展開をふまえて、両者を関連づけたところに、本論文のオリジナリティが見られる。

とはいえ、若干の問題点も見受けられる。後半部分において、中国人労働力のあり方をめぐる「人種主義」の具体的な議論が、ともすれば、清国の独立への関与をめぐる国家間関係の議論に傾斜しがちになった点は否めない。ここは、論理的な連関を改めて整理し、より深い考察が求められるところである。また単語の引用が多用される傾向があり、それらがテキスト上でもつ意味が、ややもすれば不鮮明となる箇所が見られる。引用を通じて論証を重ねることは当然の作業であるが、その意図を明確に伝える記述が、より綿密な形でなされるべきであろう。

以上、本論文は新たな思想史研究に向けて着実で重要な問題提起を行った論文である一方、さらなる考察が必要な問題点も存在する。しかしこれらの点は、今後の課題

であり、一段と深い研究によって克服が期待できるものである。よって、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。